資料　『北海学園大学学園論集　第86・87号』(1996)収録

レポート指導に関するアンケート調査の報告

北海学園大学　二通信子

Ⅰ．はじめに

昨年１２月、留学生のレポート作成指導の参考にするために、北海学園大学の経済・法学・人文の各学部と教養部の教員を対象に学生のレポートに関するアンケート調査（末尾資料）を行なった。このアンケートでは次のような内容について調べた。

1)大学の講義や演習でのレポート課題の頻度や分量、及びレポートの種類や内容

2)講義や演習でのレポート作成に関する指導の内容

3)レポート作成に関わる日本人学生の問題点や指導方法についての教員の意見

なお「レポート」という語は大学の中で広く使われているが、その意味するものは一定ではない。学生の多くは「レポート」とは「試験に代わる課題で、講義で扱われる内容に関して学生自身で学習してまとめたもの」というようなとらえ方をしているが、研究レポートのように「講義や演習のテーマに関連して学生が主体的に調査・研究し一定の結果を出すことを目指すもの」を指す場合もある。今回のアンケートでは、大学の中で一般的に「レポート」と呼ばれているものについて広くその現状を調べることを目的にしたため、事前にその内容を限定しなかった。アンケート中の「レポートの種類」の項目でも、大学で課題として課せられる可能性のあるものを広く選択肢にあげた。アンケートの結果でも、学習に重点のおかれているレポートと、研究的な性格の強いものの両方が含まれていた。

今回のアンケートは工学部以外の全専任教員（但し外国人講師は除く）１３９名に配布し、そのうち６１名から回答を得た。配布した中には外国語や多人数の講義など、通常レポートを課題としていない教員も多い。その点を考慮に入れると、大学でのレポート課題に関してある程度の傾向を調べることができたのではないかと思う。

今回の調査によって、現在行なわれているレポート・論文の指導の内容や、教員の考え方、及び指導上の困難点などを具体的に知ることができた。また学生のレポート指導についての大学での共通の課題も明らかになってきた。それらは留学生のレポート指導の内容と重なる面も多く、今後の教材の開発や指導の研究の貴重な資料となる。

次にアンケートの項目に沿ってその結果を報告する。

Ⅱ．アンケート結果

１．　履修年次別回答数

表１　アンケートの科目別回答数

	講義	演習	不明他	計
教養科目	14	8	0	22
専門科目	17	23	2	42
計	31	31	2	64

以下の各項目の集計にあたっては、科目全体を現在の教養部で開講している一般教育科目その他（１、２年次－以下「教養科目」）と、各学部の専門科目（主に３、４年次）にわけ、さらにそれぞれを講義と演習に分けた。回答者は合計で61名、そのうち２科目について回答したものが３名あり、科目数としては64科目になった。

２．レポートの課題回数と長さ

表２　　年間のレポート課題の回数

	0回	1～ 2回	3～ 4回	5回以上
教養科目	1	9	7	3
専門科目	2	23	11	4
計	3	32	18	7

今回の回答の中でレポートを課していないという回答が３人あった。もちろんこの他にもレポートを課していない科目は多いと推測される。専門の演習などでは卒業論文に匹敵する長さの論文を課しているところもあり、回数についても単純に比較できないが一応結果を集計すると表２のようになった。

１回のレポートの長さは、教養科目では「５枚以下」が８科目、「１０枚以上」が４科目、「枚数制限なし」が７科目（うち１つは５枚以上で制限なし）となっており、講義と演習であまり差はなかった。専門科目の講義では「４～６枚程度」が最も多いが、演習では長いものが多く、専門の演習の約半数の１１科目が「１０枚以上」で、このうち「５０枚以上」が４科目、「３０枚以上」が２科目あった。また演習の場合は「枚数制限なし」も多い。

専門の演習では、学生の実態に合わせて細かく段階を追って長いレポートを書くまでに指導している例もある。そこではまず自分自身を表現させるために、２分以上といった時間設定の中で自分の日常生活についてゼミで話すことから始め、感想文、新聞の経済記事への批判、教科書の記述の要約などの段階を経て書く枚数を増やしていき、年度の終りに５０枚以上の「ゼミレポート」を書かせるということである。

３．テーマの設定について

表３　　テーマの設定　　複数回答　（　）内は演習

	教師が指定	大きな課題のみ指定し 個別のテーマは学生が選択	講義内容に関するものから 学生が決める	＊その他
一般科目	13(7)	8(2)	4(2)	2
専門科目	12(2)	21(11)	8(5)	5

＊その他

一般科目－内容的には「教師が指定する」という項目に近いもの

専門科目－「６０年代の映画を見せて感想を書かせる」

「演習のテーマについてあらかじめレポートを提出させる」
「その回に扱った問題に対する解答」
「３年次に自分が最も興味をもてるテーマを日常的に追及させ、抄録を報告させ、問題意識を深めてからテーマを選ぶよう指導してる」
「全く学生が設定する」

表３のように教養科目の場合は教師が指定する比率が高いが、専門の演習の場合は学生の選択の比率が高くなる。当然のことだが、テーマの選択自体がレポートやゼミ論の重要な要素になるからであろう。

４．レポートの種類

表４　　レポートの種類　　複数回答　（　）内は演習

	一定の根拠に基づく意見・感想	文献・資料等による調査と考察	要約	講義内容の把握	読書感想文	その他
一般科目	12(4)	8(4)	6(3)	6(1)	3(0)	1(0)
専門科目	24(13)	25(16)	11(7)	3(0)	2(0)	1(0)
合計	36(17)	33(20)	17(10)	9(1)	5(0)	2(0)

グラフ１　レポートの種類

レポートの種類を回答の多い順に並べると表４のようになる。またグラフ１は回答全体の中での各項目の比率を表したものである。

一般科目の講義では「一定の根拠に基づく意見・感想」「講義内容の把握」「文献・資料等による調査と考察」「要約」「読書感想文」などの順で各項目に分散している。
アンケートの選択肢が大まかなものだったため、それぞれの科目の意図するものはこの結果だけでは掴めないが、全体的に見ると講義のテーマに関していろいろな形で学生側の主体的な学習が求められていることが窺える。なおアンケートの項目が「意見・感想」となっていることについて、「感想」という表現は相応しくないという指摘があった。

専門科目の方は「文献・資料等による調査と考察」「一定の根拠に基づく意見・感想」が多い。特に専門科目の演習では前者が最も多く、２３科目中１６科目で行なわれている。研究的な性格のレポートが多くなっている。

そのほかレポートの種類について以下のような具体的な記述があった。

・「講義に関連したテーマで、最低でも文献１冊以上を読み、その内容の紹介、講義との関係、学生の意見を述べさせる」
・「古典的文献にふれさせるため（要約を課題として課した）」

・「『意見・感想』→『講義内容の把握』→『要約』→『調査・考察』というように向けていきたい」

５．レポートの作成の指導

(1) ゼミ・講義の中での指導の有無

表５　　レポート作成の指導の有無　　複数回答　（　）内は演習

	事前の指導	事後の指導	特別な指導	指導なし	＊その他
教養科目	15(6)	8(3)	7(4)	0(0)	1(1)
専門科目	23(15)	15(9)	13(11)	8(2)	2(2)
合計	38(21)	23(12)	20(15)	8(2)	3(3)

＊その他

「参考文献表の作成について詳しく説明した」、「添削して返却」「４年生に（50枚のものを）20枚程度に圧縮して印刷刊行しているので、提出後の点検という事後の指導が加わる」など。

９割近い科目で何らかの注意や指導がされている。また３分の１の科目で特別の指導の機会を設けている。指導の具体的な内容については以下に詳しく紹介する。

(2) 指導の内容

講義や演習でのレポート作成に関する指導について多くの具体的な報告があった。それを以下の５つに分類した。

①レポート作成全般

②レポートの形式、構成

③問題の把握、テーマへのアプローチ

④文献・資料の扱い

⑤日本語の問題

実際の指導の記述で最も多かったのが、「レポートの形式や構成」についてだった。「レポート全般」という回答も含めて、回答者の３分の２の４２人が行なっている。先にも述べたように専門の演習では論文に近いものを書かせる場合もあり、そのためにもレポート（論文）の書き方についての指導がいろいろな形で行われている。また日本語に関わる問題についても、回答者の４分の１の１５人が注意や指導を行っている。文章の展開や段落構成、文脈のよじれ、句読点、誤字などが取り上げられている。以下に各項目の回答を示す。なおスペースの関係上一部は要約した。また回答の文体を普通体で統一した。

①レポート作成全般に関して

「レポート作成のために必要な項目（問題の設定・定義、資料・データ等根拠になるものの提示、討論テーマの設定など）を含むように指導した」（教養演習）

「論述の構成を明確にする。主題に則した材料を集める。書き言葉と話し言葉を区別する。素直な日本語の表現になるように、書いたものを声に出して読むことなど」（同）

「（書く前に）書式、文章の展開方法の簡単な説明。（レポート採点後）参考文献の取り

上げ方、引用方法の指導、文章として不適切な表現の指摘」（専門講義）
「主題の設定、とらえ方、文献探索と引用、提示のしかた、表記など」（専門演習）
「レポート作成上の必要事項は原稿用紙の使用法から始まり、文献探索法・推論の仕方まですべての事項について指導しているが効果があがらない。１年次からの指導の必要性を痛感する。３・４年次になって文章の構成・段落のつけ方さえ出来ない」（同）
「テーマの論点を明らかにする。レポートの書き方、文献資料」（同）
「文章の構成、書き方、文献・資料の探索方法、手段としてのワープロ・パソコンの操作方法」（専門）

②レポートの形式、構成

ａ．レポートの形式

「レポート作成、構成のしかたを簡単に。表紙の書き方、頁の必要性など常識と思われること」（教養講義）
「レポート用紙の大きさ、頁を入れること、横書き、左とじのための余白ほか」（同）
「本学専用の用紙を用いない場合の記述法、必要事項の記述手順」（教養講義・専門講義）

ｂ．レポートの構成

「1.なぜそのテーマを選択したのかその理由を最初に。／2.調査・検討したことを述べ自分なりの結論を下す。／3.最後に参考文献リストを明記」（教養講義）
「目的（の明確化）、実験（行ったことを正確に表現）、結果（事実に即した結果のまとめ）、考察（結果の表現していることの意味、直線性、再現性から法則の内容の理解、理論値との相違点の由来等）、結論（特になくてもよい）」（教養演習）
「書評のスタイルの指導」（専門講義、専門演習）
「課題についての結論とその理由を明確に区別して展開すること」（専門講義）
「『論文のためのチェックリスト』による解説（＊詳細なチェックリストを学生に配布）
初め－自分の問や、資料、背景知識について。どういうジャンルの論文かなど
中間－情報・研究カードの準備状況、最初の問やアウトラインの修正はないかなど
最終－序、結論、本文、標題及び各章のそれぞれの構成部分の役割、各章と論文のテーマとのつながりなど」（専門演習）
「1.課題の設定理由、2.問題意識、3.文献・資料の整理、4.分析対象、5.アプローチ、6.主題の展開、7.残された課題等、ポイントに合わせてまとめていけるようアドバイスする」（同）

③問題の把握、テーマへのアプローチ

「設問の把握の正確さ」（教養講義）
「出題者のテーマについての意図」（同）
「参考書をマル写ししない。要約であっても自分の言葉で書くように」（専門演習）
「課題設定の方法、考え方、レポート執筆の目的・意義、準備のための期間設定」（同）
「論点の把握の仕方、当該論点についてどのような観点から考えて結論を導いたかを自分の言葉で表現すること」（同）

「客観的な内容と自分の見解を混同しないようにすること」（教養講義）
「事実とそれに対する個人的見解との区別、順序立った展開」（同）
「意図や主張の根拠を明示すべきこと」（専門講義）
「主観と客観の区別」（専門演習）

④文献・資料の扱い

「自分の意見と文献（引用したもの）の見解を『あいまい』にせず、明確に分けること」（教養講義）
「資料の作り方、データ整理、まとめ方など」（教養演習）
「テーマによる調査対象の紹介、インタビューの方法、資料の所在、収集の方法、利用の仕方などの細部指導のほか、これまでのゼミ論文の刊行総目録を作成し、事前配布して参考にさせている」（専門演習）

⑤日本語の問題

ａ．文章の構造

「段落の切り方」（教養講義）
「文章の展開方法の簡単な説明」（同）
「起承転結を明確にする、重要度の高い順に述べる」（同）
「内容のまとめ方、読みやすくするための技術」（教養演習）
「要約のしかた、論旨のまとめ方」（専門演習）

ｂ．漢字・表現他

「句読点あとの不要なマスあけ、漢字・送りがな、コメント的な表現、段落の使い方、わかりにくい表現、日本語になっていない文章」（教養講義）
「誤字・脱字、句読点、段落の切り方」（同）
「助詞の誤り、いわゆる文脈のよじれ、誤字」（教養演習）
「日本語のルール（句読点、段落など）」（同）
「表現について」（専門講義）

なおその他**全体を通しての指導の方法**に関わるものがあった。以下にその一部をあげる。
「レポート作成のためのレジュメを解説する」（専門演習、講義）
「これまでのゼミ論の刊行総目録を作成し、事前配布して参考にさせる」（専門演習）
「レポートの要旨を報告させ、助言と問題点の指摘をして次のレポートを提出させる」
「レジュメの見本例を配布し、一応の構成、方法を何度か示した」（同）

６．レポート評価の基準

評価の基準としてポイントの高かった順に並べると表６のようになる。なおこのポイントは、重要度の高いもの（◎印）を２点、次に重要なもの（○印）を１点として計算したものである。なお**グラフ２**は**表６**を図示したものである。

表６　　レポート評価の基準　　複数回答

順位	項目	教養	専門	計
1	文章の構成（章立て、段落構成など）	22	62	84
2	テーマや記述内容についての正確な理解・把握	30	53	83
3	飛躍のない論理展開、根拠に基づく意見、客観的事実と意見の明確な区別など	22	51	73
4	正しい日本語（文法的な正確さ、語句の的確な使用など ）	20	35	55
5	文献探索や資料収集の努力	15	37	51
6	レポートとしての体裁（参考文献・注の記述の仕方、原稿用紙の使い方など）	21	24	45
7	文字の正確さ（誤字・脱字・略字などがない、読みやすく判別できる文字）	13	28	41
8	内容のオリジナリティ	13	21	34
9	引用のルール	11	23	34
10	話し言葉と書き言葉の区別（学術的な文章に相応しい文体）	11	14	25

グラフ２　　レポート評価の基準

なおあまり重要ではないもの（△印）としては次のような項目があがっている。

「オリジナリティ」（15名）　　「話し言葉と書き言葉の区別」（12名）

「引用のルール」（8名）　　「レポートの体裁」（8名）

「文献探索・資料収集」（8名）　　「文字の正確さ」（6名）　　＊（　）内は回答数

表６の結果とあわせると、全体的に学生のレポートとしては、「正確な理解に基づく、論理的な飛躍のない、きちんと構成されたレポート」が求められていると言えるであろう。

７．指導が必要な事項

また上記の項目の中で今後指導が必要なものとしては、以下のように前述の評価基準の上位にあった項目がやはりあげられている。

「文章の構成」(21名)　　「論理展開」(16名)　　「正しい日本語」(13名)
「文献探索」(13名)　　「テーマや内容の正確な理解」(12名)

「文章の構成」と「論理展開」は表裏の関係にあり、両者をあわせて「論理的な文章の展開とそれを的確に表現する能力」の養成が必要とされている。

なおその他としては「文章により自分の意見を伝えるための構成及びその技術」「レポートの形式的要件について」「『方法論』一般の理解」「専門知識の深さ」などがあげられている。

８．学生のレポートの問題点や指導の方法についての意見

先に第５節で現在行なわれている指導について紹介したが、それに加えて現在の問題点や指導の方法について多くの意見があった。これらを以下の５つの項目に整理した。

①レポートの書き方をはじめとする基礎的な訓練の必要性
②本を読む力、文献や資料に対する批判的・客観的な態度の不足
③学習に対する主体的な姿勢の問題
④漢字・用語・文章表現などの日本語力の弱さ
⑤学生の教育条件や環境の整備の問題

ここでは「レポートの書き方」と同時に、文献の批判的な読み方や論述の形式などを、入学後の早い時期から教育すべきであるという意見が出されている。しかもそうした教育は多人数の講義では極めて困難で、小人数の演習の形で行なわれることが望まれている。

また指導にあたっては、「レポート・論文」などの客観性が強く求められる文章と一般の文章との違いを学生に明確に示す必要があることが指摘されている。さらにレポート指導のための適切な教材の収集に苦労しているという声もあった。

以下アンケートの８の自由記述の部分を、上記の①～⑤の項目に沿って紹介したい。なお一部の意見については要約し、回答の文末を普通体に統一した。

①レポートの書き方をはじめとする基礎的な訓練の必要性

ａ．入学後の早期の指導を

「学問の方法についての演習が必要だと思う。本の読み方、図書館の使い方、レポートの書き方、新聞の利用法など。」（教養講義）

「入学直後に数回費やして徹底的に指導する必要あり。２年次から受け持っているので99％は本当に１年次を経てきたのかと疑問に思うこと大。」（同）

「文章力が欠けているので、基礎的な訓練が必要と思われる。法学部のゼミでは毎週１回４～５枚(200字詰）にレポートを書かせて添削をして２年ほど訓練を続けると大体の水準まで到達するように思われる。」（専門講義）

「話し言葉から書き言葉に正しく直すことのできない学生が多い。技術の習得のため文章表現のような科目を１年生で履修させることが望ましいと思う。」（同）

「・日本人についても（レポートの書き方等の）講義が必要。
・パソコン等も使ったコミュニケーション技術。
・学術的ではない文章、たとえばビジネスで必要とされる実践的な文章の訓練（たとえば簡潔でだれにでもわかる表現の工夫など）」（同）

「教員の個人的能力の限界→組織的対応、低学年からの対応の必要」（専門演習）

「レポートだけを取り出して議論し、指導しても効果があがらない。本学の現状を直視したうえで、どのような学生に育てるのかという教育課程の一環と位置付けるべき。自分の意見を持ちそれを展開でき、定期試験の答案をしっかり書ければ特別な指導が不必要と思うが、まともな答案さえ書けないのが現状で、またしっかりとノートを取れない学生もいるので、１年次からの日常の指導が大切と思うし、本学の教育のありかたを議論すべきような気がする」（同）

「・レポートというよりは『論文（枚数が少ないとしても）の書き方』を指導する必要がある。

・学生全員に対して１年次に。

・ものを教え込むということではなく、研究し、論文にまとめ、発表する能力を形成させることが大切。４年生でまもなく卒業する頃になっても、文章の構成はおろか、段落のつけ方も身についていないレポートが少なくない。大学教育にとって一番大切なことが欠けているように思う。」（同）

「レポートをワープロで打つことを義務づけていて、手書きレポートは不可としている。ワープロで書くことにより、内容やその構成を常にチェックできそこから新しいものを発見する可能性が大きいと思うから。」（同）

「形式も含めレポートの書き方は大学入学時から何らかのかたちで身につけさせる必要がある」（同）

「くりかえし書かせると、だんだんよくなる者も多い。」（専門講義）

「とにかく考えて書く習慣をつけること、たくさん書くことが大切だと思う。教員がレポートや論文のチェックを双方向で出来るだけの時間的ゆとりも必要」（専門）

「文章表現や日本語力などの指導は必要と思うが、それにかける時間はない。学生はレポートの書き方がわからず初めてという。よって自分のレポートに限ってはこう書いてほしいという指導をしている。」（教養講義）

「作文教育が小学校の低学年で滞っているので、今更基本的なことから学ばせるのは無理である。よってせめてレポートの体裁だけは記述してもらいたい。それは最低必要であると同時にそれが評価の基ともなるものだからである。」（同）

ｂ．客観的・論理的な文章を書く習慣を

「構成に時間をかけるように、つまり論述の起承転結を最初にしっかり考える習慣をつけるように指導する必要があるだろう。」（教養演習）

「私は主観的な論理展開や“情念的な表現”や“思弁的な方法”を最も否定されなければならないと思っている。“客観性をもたせること”あるいは“実証的であること”が唯一大切なことと思っている。そのため事実の表現のために文章を受け身形で書くことの重要性を教えている。筆者としての“私”が出てこないような文章を書かせたいと思っている。」（同）

「単なる思いつきと客観的考察とを明確に区別することの習慣化

・論述の効果的形式の基本的習得

・対立する意見をも受容できる発展的思考の涵養」（教養講義）

「レトリックや論文論、ないし場合においてはディベートに関する講義と訓練」（専門演習）

ｃ．文章表現の指導方法に関して

「1.ワープロ普及に伴う指導のあり方
2.表現法の授業に使える教材の収集に苦労している
3.添削指導を学生の前で行うための機材（教具）の扱い方を含め、教授方法のあり方」（教養講義）

②読書力の弱さ、文献や資料に対する批判的・客観的な態度の不足

「特定の文献だけに頼って他の類似の文献を探索する意欲が非常に薄弱な点が問題。文献を読んで引用する際に、批判的に読むことが出来ない場合が多い。統計データの引用に当って、年次や出典を欠落させるなど、データの限界に対する関心が弱い」（教養講義）「レポートを書く以前に本を読む力がないことが心配。本、論文を指定し、その内容を報　告させることを課題としているが内容を把握しているかどうか確認するために、レポー　トの他にテストもしている。そうしなければ大多数の学生のレポートはごまかしと欺瞞　に満ちたものになる。」（教養演習）

「参考文献の一つしか読まない傾向がある。反対意見について引用部分しか読まずにうのみにしがちである。何故そうなるのかを真剣に考えようとしていない。就職希望先についての研究についても同じで、書籍を読むことが不得手（嫌い）なように感じる。ビデオとかコミックやイラストを多用して、楽に勉強する方法を少し取り入れる必要を感じて少しずつ実行している。楽な方法は本意ではないが、今の時代では努力しろといってもなかなか通じないようだ。」（専門演習）

③学習に対する主体的な姿勢の問題

ａ．学生の主体性の問題

「とにかく読書量が少ないのと問題関心の稀薄さに驚かされている。（専門講義）

「自発的な努力は期待できないので成果をあげるためには、ある程度レポートを強制せざるを得ない。しかしレポートを強制するゼミは忌避され易に流されるのが決定的な問題である。」（専門演習）

「特にゼミ論の場合、本を丸写しにしてくる学生が多い。自分で考えた文章を書ける学生が少ない。」（同）

「一部に既刊本の一部を丸写しするものあり。この場合さらに自分の意見を書かせるようにしている。」（同）

「指導を十分に行っていないことを考えると、あまり要求水準を高くすることができず問題点はあっても、自分で努力してきちんとまとめてあれば良い評価を下す傾向があり、教師・学生双方の問題としていつも反省させられている。」（専門講義）

ｂ．指導する側の考え方や方法

「いつもという訳にはいかないが、模範的なレポートが出たときは掲示板に掲示するほか、

プリントにして教室で配るようにしている」（専門講義）
「主体的問題意識を学生が日頃の日常経験でどのように温めているか。又講義、テスト、情報を自分の身についた知識として一歩一歩深めていっているかどうかを考えるようにしてほしいし、そのためのきっかけとなるような話題を日頃から探索している（同）
「他人のまねをしない。幼くても自分の意見を大切にするよう指導している」（同）
「単に文献や教科書の記述の要約ではレポートを課した意味もなく、進歩は感じられない。試行錯誤を続けながら学生の能力を引き出す方法を模索している。現在の方法に学生が応えてくれているのでどんなものが提出されるか楽しみ」（専門演習）
「学生時代に全力を投入した２年間の結晶としての論文だという認識を培うように努力しているが、少し指導をゆるめると、１冊の本の要約とか各機関のパンフレット風の報告書の要約のようになってしまう。だが、毎年新しいテーマの発掘や身近な問題の掘り下げが少しずつ彼等の自信につながっているらしいことが伺える」（同）

④漢字・用語・文章表現などの日本語力の弱さ

「用語の不正確、誤字の多さ（固有名詞でさえ！）」（教養講義）
「誤字、あて字が多いのに驚いている。ワープロで作成する学生が２割位いるが、ワープロを使うと漢字を覚えない欠点もある。」（教養演習）
「文字が正確で読み易いこと、書く場合の濃さも大切。使用語彙の概念が独りよがりで何を言っているのか分からないことのないように指導している。」（教養講義）
「法学のレポートなので解釈論が中心となるが、結局は客観的事実をふまえた私見の展開が求められる。今の学生はよく資料にあたって、真面目に勉強していることはわかるが、やはり正確な日本語の能力に欠けていることを痛感させられる。」（専門演習）
「文章表現に慣れていないという印象は受ける」（同）
「科目によってレポートの性格や目的が違うので一概には言えないが、共通点として感じるのは文字の記述の不正確さ、参考文献の単なる抜き書きとつなぎ合わせが目立つこと、総じて文章表現力の不足。演習外の期末課題レポートでは参考文献の利用法についての無知、レポートを無視した主観的意見、感想の羅列など」（同）

⑤レポート指導のための条件や環境の整備の問題

「レポート提出が合計で1000を越えて、一つ一つチェックを十分にできなかった。いうまでもないがレポートの場合は２０人以下のクラスとか演習に限る」（専門講義）
「レポートは資料の配布からレポートの受領、整理など教員の事務作業が大変。受領、整理の段階で事務局が少し手伝っていただけると有り難い。」（教養演習）
「文献探索において図書館機能が貧弱。書籍量の問題もさることながら雑誌・紀要などは解放される必要がある。」（専門演習）
「予算の裏付けがない」（同）

Ⅲ．アンケートの結果から

今回のアンケートでは、日本人学生にも「レポート・論文の書き方」についての小人数での学習が必要であるという意見が多かった。現在でもいろいろな形で指導が行なわれて

いるが、さらに早期にそのような指導が行なわれればより効果的であろう。問題はそのための態勢であるが、本学でも教育課程の改革に伴って、一部の学部でレポート・論文の書き方などを学ぶ新入生のための演習が検討されている。全国的に見ても宇都宮大学国際学部の初期教育セミナーや、北海道大学医学部での新入生を対象とした文章表現の演習のような、新しい試みが徐々に始まっている。学生数や担当者の配置など問題は多いと思うが、希望者にだけでもこうした学習の機会が与えられることを願う。

また今回のアンケートでは、指導すべき内容として、狭い意味での「レポート・論文の書き方」に加えて、「文献や資料の扱い方」、「目的に適合した論述の形式」、「段落の構成」、「読みやすい文章を書くための技術」などがあげられている。それに加えて入門期の指導では、随筆のような主観的色彩の濃い文章と、レポート・論文などの客観性や論理性を重んずる文章との違いを、明確かつ具体的に示すことも重要であろう。学生は教科書をはじめ日常様々な論理的文章に囲まれているが、それらを読む場合でも、内容を読み取ることに意識が集中していて、全体の構成や論理展開の方法に注意することはほとんどない。それだけに、「レポート・論文の書き方」の学習では、論理的で説得力のある文章とはどういうものなのかを、意識的に学ばせる必要がある。留学生の場合はそれに加えて、定義・比較・理由説明などそれぞれの文章の目的に応じた文型や表現、対象となっている分野で使われる語彙なども学習しなければならない。

さらに国語力（日本語力）や漢字に関わる問題についても、アンケートでかなりの指摘があった。これについては国語力の弱さに加えて、「書く」ということに対する学生の意識の問題も大きいのではないかと思う。学生のレポートの中には、表現することに精一杯で、「他者に読ませるためのもの」という基本的なことが抜けていると思われるものが少なくないからである。

レポート・論文の作成に関して学生が身につけるべき「レトリック」は、多くの手引き書で言われているように、「どうしたら他人に明快かつ正確に伝えることができるか」という点にすべて集約される。そのために、飛躍のない論理の展開、適切な段落分け、ねじれのない文、さらに効果的な句読点の打ち方、正確な文字、読みやすいレイアウトなどの配慮が必要になってくる。明快かつ正確な文章を書く能力は、試験の論述問題やゼミでの発表にも必要であるし、社会に出ても求められるものである。学生をそのような自覚的な書き手にするための一つの方法として、学生同士の交換読みによって、自分の文章を外側から客観的に検討する経験をさせることも有効であろう。

今回は日本人学生のレポート作成に関して見てきた。留学生と日本人学生とでは、日本語力や背景的知識に関しては違いがあるものの、レポート・論文作成に必要な論理的な思考や正しく伝えるための技術に関しては、同じように学習の段階にある。今回のアンケートは、日本人学生と留学生が、この点に関して共通の課題を持っていることを浮き彫りにしてくれた。今回の結果を、留学生のための教材開発や指導の研究に生かしていきたいと思う。またそれが日本人学生にとっても価値のあるものになれば幸いである。

最後に今回のアンケートに協力してくださった教員の皆様に、改めてお礼を申しあげる。

付記　なお、今回のアンケートは札幌大学非常勤講師の佐藤不二子氏と協力して作成した。札幌大学においても、佐藤氏によって非常勤の先生方を対象に調査が行われ、現在まとめが行なわれている。その結果も合わせて今後の資料としていきたい。